

月報

97号

発行所

青丘文庫

編集・発行★雑誌 電話
〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1
×ソンド青丘ビル2F
TEL (078) 734-5989
FAX (078) 735-0660

在日朝鮮人運動史研究会第一六九回例会

金達寿研究

― 人生の軌跡と文学の軌跡 ―

崔 孝先

いままで「在日韓国・朝鮮人文学」という包括的な呼び方で扱われて来た「在日文学」は、その範囲の広さと特徴の違いからして今後の研究では、作家一人々々を丁寧に扱って行く作業が行われるべきである、またその段階に十分に來ていると考えられる。その意味で報告者は「在日文学」の始まりを成している「在日一世文学」の中の一人・金達寿を選んで「金達寿文学」の特質について研究して行くつもりである。今回の報告では「金達寿文学」の研究における初步段階として、その文学を総括的に三つに分けることから始めた。

金達寿は朝鮮の近代化とともに崩れかかって行く田舎の「両班」の家柄の生まれで、その家の破産を意味する日本への渡航は経済の傾きによる出稼ぎの一環であった。金達寿は幼い時期から被圧迫民族の一人として味わわざるを得なかった国家的矛盾と、貧乏であるがゆえに日本人の友たちと同じことが出来なかった家庭的矛盾、という二つの矛盾を背負って成長して行く。金達寿はそのような時代的環境によって感受性に刻み込まれるものが多く、日本人から不当な差別を受けながら惨めな生活をしている朝鮮人のありのままの生

活を描くことによって、日本人と朝鮮人の間柄を「人間化」とするという創作の根本目的をもって文学の道に入る。

一九四〇年八月「位置」から一九九一年十一月「日本の中の朝鮮文化」シリーズの完結に至るまでの金達寿文学は総括的に三つの流れで分類出来る。初期の「ごみ」「雑草の如く」とか、五〇年代の「矢の津峠」などで見られるように在日同胞達が日本帝国の支配者から様々な差別を受けるといふ悪条件の中でも「生」のために一生懸命に生きていた姿を描いた「在日同胞生活史」の流れがその一つである。「後裔の街」以後の長編づくりで金達寿は溢れる情熱と意欲、使命感を持って朝鮮民族の正しい進路だと堅く信じていた社会主義改革Vのため参与文学たる色を帯びて行く。理念性濃い「社会主義者闘争史」の流れがその二つである。一九六六年「苗代川」から始まる「古代史」の流れがその三つである。この三つの流れは各々民族主義、社会主義、虚無主義を乗り越えた民族主義、という思想的区別を持つ。

「在日同胞生活史」「社会主義者闘争史」「古代史」の三つの流れの作品群に分けられる「金達寿文学」は「史の文学」である。金達寿は「史の文学」を通じてもっぱら帝国主義に抵抗し続けて来た。「金達寿文学」を通じて過去を知り、過去を知ることによって現在を正しく見つめられる、またそういうことが原動力となって未来に繋がるということに「史の文学」としての「金達寿文学」の価値と意義があると考えられる。

朝鮮民族運動史研究会 第一三七回例会

(一九九三年六月一九日)

上海における陸海軍慰安所と朝鮮人(その二)

藤永 壮

本報告は、第一二五回例会(九二年七月)での報告「上海における陸海軍慰安所について」の続編である。前回、課題として残された問題を中心に、このたびは次の三点にしばって考察した。

①上海の海軍慰安所は、現時点で確認される慰安所のなかで最も設立時期が早いと言われるが、その前身は存在するのか。存在するとすれば、それはいかなるものであったのか。②一九三〇年代に入ってから急増する朝鮮人の「接客婦」や私娼は、慰安所経営と関連があるのか。③上海にどのような慰安所が存在し、どのあたりに分布していたのかを、より掘り下げて究明できないか。

①について。前回の報告で私は、一九三一年の時点で上海には三軒の海軍慰安所が存在していると述べたが、その実体は「三好館」「小松」「大一」などの屋号をもつ「貸座敷」であることが確認できた。海軍慰安所の前身が、ほかならぬ日本の公娼制度下の貸座敷であるならば、慰安所開設の前提として、上海における日本当局の売買春管理の実態を明らかにする必要がある。

上海の日本総領事館は、すでに一八八〇年代初頭より「からゆきさん」の取締に乗り出していたが、一九〇五年から〇六年にかけての総領事館令「芸妓営業取締規則」「料理屋営業取締規則」の制定で、日本型公娼制度が本格的に導入されることになった。

また一九〇七年五月、設立されたばかりの上海居留民団は二種の「課金条例」を公布し、風俗営業に対する「課金」は居留民団の重要な財源にもなった。一方、上海共同租界の行政全般を担う工部局は、ようやく一九二〇年になって「妓院領照章程」を公布し、

売春業者に鑑札を与えつつ、五年後の妓院全廃をめざした。しかしこの政策は、かえって私娼を増加させ、フランス租界や租界外地域への売春宿の移動をもたらしただけであった。

このような状況のもとで、南京国民政府の意向を受けた上海市公安局は、一九二九年六月、公娼制廃止に踏み切り、翌三〇年四月には租界外に存在する日本人経営の貸座敷三軒にも閉鎖を要求した。しかし在上海日本総領事館は、これら貸座敷の抱える「乙種芸妓」「娼妓」を「酌婦」に名称変更させただけで営業を継続させた。海軍慰安所の前身たる貸座敷とは、こうして改編されつつ存続していた日本型公娼制度の一変種であった。

②について。前回も指摘したように、一九三〇年ごろの上海には朝鮮人のダンサーやカフェー女給、私娼などが存在しており、このような朝鮮人女性は一九三〇年代半ばに至って急増する。一方で朴日碩なるカフェー経営者が、慰安所経営に乗り出した事例も発見され(慰安所経営にあたった朝鮮人は数名確認できる)、女給などが慰安婦に転じた可能性は否定できない。日本型売買春メカニズムの朝鮮への「移植」は、親日派による風俗営業と慰安所経営(一方で「接客婦」や朝鮮版からゆきさんの「慰安婦」への転換?)を経て、大量の「慰安婦狩り」に帰結したと言える。

③について。上海在住の雑誌記者・徐平氏の精力的な調査で、慰安所の具体的な位置がかなり明らかになった。徐平氏の協力を得た本年三月の踏査で、私は現時点で確認できる上海の慰安所跡を、ほとんどすべて訪れることができた。本報告ではこの踏査にもとづき、その位置や建物の写真などを紹介したが、慰安所が集っていたのは、日本人の居住地域で、海軍特別陸戦隊本部のあった虹口地区と思われる。麻生徹男医師の記録で知られる楊家宅の陸軍直営慰安所は、建物が取り壊されたため厳密な位置を確定できなかったが、江湾鎮に存在したという民間経営の慰安所については、一カ所だけ建物を見ることができた。

日韓キリスト教史研究会 第四五回例会

一九九四年六月二十五日(土)

「キリスト同信会と朝鮮伝道」 信長正義

一八八八年頃に日本橋一致教会では青年たちが柔術道場で啓蒙運動を行なっていたが、ある事件をきっかけに牧師不信を抱き、教会を脱退して「無教派、無牧師」の集まりをもった。ところが受洗希望者が出て困ったとき、何の組織にも属さないで来日した英国人宣教師・ブランドを介して、青年たち七人とブランドの集会が始まった。キリスト同信会の発端である日本橋教会で牧師辞任の後に主日の説教を担当していた神学生・乗松雅休もやがてこの群れに入り、朝鮮伝道を決意する。一八九六年末神戸港を出発し、仁川を経由してソウル(京城)に着き、そこでこの群れの人々から紹介されていた在留日本人等に会うが、そこに日語学校の生徒曹憲煥がおり、彼を朝鮮語の先生としながら、彼が連れてくる仲間にも福音を伝えたり、習った朝鮮語で路傍伝道をして信者の獲得をしていった。乗松が朝鮮へ行った二年後にブランド夫妻も朝鮮に渡った。翌年、乗松は同僚の伝道師の姪である佐藤恒子と結婚した。一九〇〇年乗松は水原に移住する。京城での生活は貧しく何も食べるものがなく卒倒したこともあり、見兼ねたブランドが援助するがそれを断ち切るためと、水原の信者が乗松に水原移住を懇望したからである。〇三年に浅田洋次郎らが朝鮮を訪問し、京城・水原の様子を報告しているが、乗松一家の全てが朝鮮式の生活に驚くと同時に、乗松の朝鮮伝道の成功の原因を知る。〇四年の日露戦争の影響でブランドは日本に帰国するが、〇七年から〇八年にかけての復興会で朝鮮キリスト教が大躍進する影響もあり、乗松の集会にも多くの人々が集まった。貧しい中これらの人々を快くもてなしていた恒子が四人の子どもを遺して肺炎に罹り死亡する。〇九年、乗松は加藤和子(第三代日赤病院看護婦総監督)と再婚する。この年、乗松の家では手狭となり集会所を建て、これを聖書講堂と名付けた。その記念集会にはブランドをはじめ多くの日本人が参加している。日本組合教会系の京城学堂の教監・宇津木勢八は組合教会からも学堂からも離脱してこの群れに加わって伝道者となり、一年に日本に帰国するまで乗松を助ける。乗松の朝鮮伝道を支えたものは日本のこの群れ、即ち「同信

会」の人々であり、また、彼の人の柄、信仰を受け入れた朝鮮の信者であり、伝道者となった人々である。この頃彼を支えた朝鮮人は崔馬太、崔景祐、崔仁植、崔貞植、曹憲煥、池相泰ら数多くいて、京城、仁川、利川、金浦、魚山、慶州の方にまで足をのばし伝道に励んでいた。日本人として初めて海外伝道して十八年、乗松は一四年に突然帰国する。身体の影響もあったが恐らく和子が、恒子と比較されそれに耐えられなかったこと、四人の子どもを押しつけた乗松は和子をかばったの帰国だと思われる。乗松は二一年に小田原で亡くなるが、その間四度朝鮮を訪問している。一七年に京城に住む堀佐太郎の報告によれば、当時の群れは、京城と水原の二つの聖書講堂と八つの集会所、二七の家庭集会を持ち、総勢四百数十人となる。これは確かに小さい群れではあるが、反日運動のなか日本人乗松が蒔いた種が結実した証しでもある。四度目の朝鮮訪問は一九年二月で、三・一独立運動を目のあたりにする。彼のその時に報告には「三・一独立運動など叫び、不謹慎の軽率妄動をなす群れもありて……」とあり、朝鮮人の独立に対する心情を全く把握していない。これは紛れもなく彼が日本人であつたからに他ならない。また彼の強烈な再臨信仰は現世の世俗的なものに全く無関心であつたからである。しかし、彼の信仰を受け入れた朝鮮人との人格的交わりは厚い信頼関係にあつた。乗松の危篤を聞いた金太熙や酒井三郎らは釜山から船に乗り、小田原に急行するが臨終に間に合わず、乗松の遺骨と灰を朝鮮に持ち帰り、水原に裕福ではない朝鮮人信者がお金を出しあい記念碑を建てた。乗松が臨終の時、「朝鮮に行きたい」という言葉を聞いた吉住定吉(長女朝子の婚約者で伝道師)は、乗松の後を継いで朝鮮行きを決意した。吉住は毎月第三月曜日に仁川基督教青年会館で婦人講座を受け持ったり、毎水曜日には聖書講読会を開いたり、各地の信徒を訪ねたりしていたが、三年後の二三年には東京に移住している。偉大な前任者乗松と比較されての帰国ではないかと思われる。しかし、金太熙を中心としてその後もこの群れは生きつづけ、今日もなお「韓国キリスト教同信会」に引き継がれ、日本と韓国の「同信会」同志の活発な交流が続けられている。

◆新着図書御案内◆

- ・韓国初期労働運動研究
- ・韓末在日韓国留學生の民族運動
- ・日本の侵略政策史研究
- ・在韓韓人―人類学的接近―
- ・抗日闘争史
- ・大同軍實記
- ・朴殷植の社会思想研究
- ・遺芳集
- ・呂運亨先生闘争史
- ・夢陽呂運亨全集1・2
- ・臨政と李東寧研究
- ・韓国満州関係史の研究
- ・韓満交流史研究
- ・国外韓人社会と民族運動
- ・満州韓人民族運動史研究
- ・신진회 연구
- ・민국사상의 한 연구인
- ・나라 질의 한 연구인
- ・민국사 이민주

- 尹 亦徳著
- 金 基周著
- 歴史学会編
- 李 光奎他
- 李 煥熙著
- 申 福龍著
- 慎 鏞高著
- 趙 素昂著
- 李 萬桂著
- 同発行委員会
- 李 煥熙著
- 李 仁榮著
- 李 龍範著
- 尹 炳範著
- 朴 煥 著
- 이준호
- 김유원
- 전경수
- 이길용

◆研究云御案内◆

合同研究会 一九九四年九月十八日(日)

△第一部▽

朝鮮民族運動史研究会 第二三八回例会

時間 午後一時半～三時

報告者 金森義作氏

テーマ 「金鑲珠について(1)」

△第二部▽

在日朝鮮人運動史研究会 第二六九回例会

時間 午後三時半～五時半

報告者 飛田雄一氏

テーマ 「朝鮮人強制連行と宗教教師

勤労働員会」

日韓キリスト教史研究会 第四七回例会

一九九四年九月二十四日(土) 午後二時

報告者 李 省農氏

テーマ 「関西における朝鮮人教育と

キリスト教」

*場所はいづれも青丘文庫にて